

香取遺産

vol.145

— 佐原の河岸文化 — 「だし」は文化の窓



▲大正初期の「だし」(護岸工事前)
左は明治15年(1882)に架けられた石造隻眼橋の「協橋」。
その奥には木杭横矢板仕上げの護岸も見える



▲昭和初期頃の「だし」

かつて、小野川には一軒に一つといわれるほど多くの「だし」が造られていました。「だし」は陸から川へ降りるための石段と、岸から川面に張り出した荷揚げ場を持った接岸施設です。昭和の初め頃までは、小野川に順番待ちの舟がずらりと並んでいたそうです。古文書では「出シ」と書かれ、稲揚場であったと伝えられています。

赤松宗旦の「利根川図誌」では、「佐原八下利根附第一繁昌の地なり、村の中途に川有て新宿・本宿の間に橋を架す、大橋と云、米穀・諸荷物の揚さげ、旅人の船、川口より此所まで先をあらそひ、兩岸の狭きをうらミ、誠に水陸往來の群衆昼夜止時なし」と河岸でのにぎわいを記しています。

「だし」の本来の機能は荷揚げ場ですが、それを利用して多くの人が佐原を訪れていました。その中には著名な文化人もいて、例えば賀茂真淵(国学者)の高弟である加藤千蔭と村田春海や、菅茶山(漢詩人)、渡辺華山(画家・田原藩士)、小山田与清(国学者)などが訪れています。千蔭と春海は、寛政6年(1794)、千蔭の門人であった永沢躬国の家に滞在しています。それを記した「香取の日記」では、佐原へ到着する様子を「みくにが家の前へ舟よせ



●は、現存する「だし」の位置

ぬ、躬国でむかへり」と記しています。永沢躬国は歌人として活躍した人で、家は本川岸にありました。また、小山田与清は、文政3年(1820)に香取・鹿島の両社を参詣した時の旅行記「鹿島日記」のなかで、「神崎の津より舟にて流れのまにく下り、佐原の里の本宿河岸なる永澤久香半十郎が家に着きぬ」、「本宿河岸より舟に乗りて鹿島さまへ赴く」などと記しています。久香は躬国の弟で、この時に躬国も一緒にもてなしています。いずれの旅行記も、当代一流の文化人と地元の人との豊かな交流を記しています。

このように、文化人はもとより、東国三社参りの旅人の多くも、「だし」を利用して佐原の食・文化に触れていたことは容易に想像できます。「だし」は荷揚げ場としての商業的利用のみならず、文化を受容し、また、発信する窓口としての機能も有していたのです。

関生涯学習課

☎1224